

「イスラム国で日本人ジャーナリストの後藤さんが処刑されたことに関して思うこと。」

2月1日の朝、いつものとおり布団の中で5時のNHKラジオのニュースを聞いていたら突然「ただ今入りましたニュース」ということで後藤氏の処刑が報じられた。「何故、どうして民間人の彼が、」とニュースの真偽と、私自身の耳を一瞬疑った。あまりに非道で、残忍で、言葉に表しようのない無力感が一瞬、身体全体を覆った。

縁あってこの世に生を受けた人間として動機がどうあれ、同じ人間が同じ人間の命を奪うなど私には到底考えられない。ましてや本来は人間の生命を一番尊ぶものと信じられている宗教グループ(?)が、手をかけるなど世の中狂っている、今後何を信じていけばいいのか世の中に対して不信感が募ってくる。

私がこの現状に異議を唱えようがどうしようが、これが今の世界の現実であり、その現実を直視しつつ、高ぶる感情を極力抑えつつ、この背景を考えてみた。

先ず、一部メディアでも報じられているが、安倍総理の中東四か国訪問の最初の訪問国エジプトでの政策スピーチが今回のトリガーになっているものと思わざるを得ない。

「ISIL(イスラム国)がもたらす脅威を食い止めるため、ISILと闘う周辺各国に2億ドル程度の支援を約束します。」(2015.1.17エジプトコンラッドホテルでの安倍総理の発言原文)

今回のイスラム国の日本人拉致の中で彼らが「日本が十字軍に加担…」と主張する根拠として時系列的にみてこの安倍総理のスピーチがあるのは確かであろう。この彼らの主張を受け、安倍総理、菅官房長官、及び各外交チャネルを総動員して、あわててこれを否定し、「この2億ドルの援助はあくまで人道援助が目的である」と弁明を続けたが、人道援助だけが目的と読み取るのには無理があろう。エジプトに経済界の重鎮面々を引き連れて、大見得を切ったスピーチであり、ISILに非難されて慌て弁明に務めるなど見苦しいとさえ残念ながら私の目には映る。

安倍総理は、後藤さんがついに処刑されてしまったとの報告を部下から受けた最初の首相官邸での記者会見の様子を「涙をかべながら…」と報道されたが、私はこの総理の涙を素直には受け取れなかった。それどころか日本人の生命、財産を守るのが総理の最大の使命であるはずにもかかわらず、彼(総理)の姿勢が逆に我々を危険に陥れているとさえ感じざるを得なかった。

その総理の記者会見の中で、彼は今後も「国際社会と協力して…」という言葉が目立ったが、実はこの総理がいうところの「国際社会」に問題を感じる。総理がメディアの前でいう国際社会とは、アメリカを中心としたいわゆる「有志連合」であり、グローバルな国際社会ではないのが問題である。ISILはこの有志連合に敵意を持っている組織であり、これを国際社会と詭弁して恥じない安倍総理とは基本的に立ち位置が異なる。

翻って安倍総理のこれまでの政治レベルでの発言を顧みると、「学識経験者」「有識者会議」「広く地域社会の皆さん」と彼の口から出る言葉は、どれもみな民主主義の根本をなすもっともなもので、これを国内の各メディアがそれをそのまま報道するから、一般の国民もいつの間にか、その言葉に引きずられて行ってしまっているような危惧を感じる。

しかしここに大変な落とし穴が潜んでいることを感じ、又それを評価する選挙時の各有権者が目を覚ます必要があると指摘せざるを得ない。というのは総理のいう学識経験者、有識者、地域社会にしても現実には、ほとんど全て政府の意向に沿った人物を選任しているため、そこから集約される答申は全て政府の意向に沿ったものとなっているのが現実である。これでは有意な国民を欺くための意図的に形成された民意であり、民主主義が基本的に求める「民意」と言えようか。

投稿 2015. 2. 1 T. I (OB)